

18 世紀の語源学

——ド・ブロスとテュルゴ——

糟谷啓介

今日、語源学とは、単語の過去の形態や意味を探求する学問だということになっている。けれども、語源学 *etymologia* という語の語源はといえば、それは *etumos* (真実) + *logos* (論)、語の〈真実〉を探求する学であった。語は本来、その表象する意味あるいは指示する客体と自然的な結びつきをもっているはずであり、それこそ見出すべき語の〈起源〉—ストア派はこれを語の *cunabula* と呼んだ一なのだった。つまり、語の〈起源〉こそその〈真実〉が宿る場所なのである。こうして、語源学には、言語の制定に関する自然説もしくは *Cratylisme* が寄りそうことになる⁽¹⁾。18世紀という啓蒙の時代にあつて、こうした語源学の奇妙な体系を作り上げたのが、シャルル・ド・ブロスである (*De Brosses, Traité de la formation mécanique des langues et des principes physiques de l'étymologie*, 1765⁽²⁾)。

ド・ブロスの語源学は、ひとことで言ってしまうえば、あらかじめ普遍的原初言語を仮定し、それを構成する語要素を歴史言語の中に発見しようとする試みである。それを根底から支えるのは、言語記号の恣意性の否定である。「名前が何の十分な理由もなく客体に課せられたと言うことは、原因なしに結果がつくられることを肯定することになる。それは理^{ボゾン・マンス}性の基本的な観念に反している⁽³⁾」。ことばと物とが合致するような言語こそ、ド・ブロスの言う原初言語である。けれども、それを作ったのは神のような超越的存在者ではない。それは〈自然〉*Nature* である。「単語を形成するにあたって、自然 *nature* が示した最も単純な最初の規則は、単語が真実であるようにということだ。つまり、発音器官が物を表象するのと同様に、単語は名示される物を表象する。単

語の真実⁶⁵は観念の真実と同じく物と一致することにある。だからこそ、単語を派生させる技術は *étymologie* と名づけられたのだ。……最初の名前はそれが表わす物の本性 *nature* にふさわしかったにちがいない。そうでないと判断することは、人間が道理からはずれていたと信ずることだ。なぜなら、そうだとしたら、人間が話す目的は（他人に）理解されることではなかったということになってしまうから⁶⁶」。したがって、原初言語は「よくそう思われているように恣意的 *arbitraire* で規約的 *conventionnel* なものではない」。それは「必然性の真の体系」である⁶⁷。こうして、世界の中に即自的に存在する合理的の本質である〈自然〉は、音声と観念と客体を一致させることで原初言語を作り出すのである。

ド・プロスの理論で特異なのは、この原初言語の構成にとって人間精神は全く能動的な役割を果たさないということだ。言語の必然性の根拠は、外的物体の固有性と肉体的発音器官の運動との分かちがたい結びつきの中にある。そのありさまをド・プロスはこう描く。「発音器官は声によって描写しようとする客体自体がもつ形象をできる限りとる。客体がくぼんでいればくぼんだ音声を、⁶⁸ 客体が粗ければ粗い音声を与える。このようにして、こうした状態におかれた器官の形と自然な動きからでる音声⁶⁹が、物の名前となるのだ⁷⁰」。ここにあるのは単なる音声象徴による表象のよびおこしではない。発音器官の運動それ自体が客体の状態を模倣するのである。ド・プロスの目ざしたのは、言語をあらゆる抽象性、観念性からひきはがして、物理的要素からなる機械論的体系へと還元してしまうこと、つまり音声は発音器官の運動へ、意味は指示される客体へと還元してしまうことだった。だから、ド・プロスが、原初言語の構成は発音器官と客体によって「物理的に決定されている」と言うのは、たとえても誇張でもない。原初言語は文字通り「かくも自然的で機械的なばねのおどろくべき作用⁷¹」によって組織された「器官的、物理的、必然的」な構築物なのである。その著書の題名『諸言語の機械的形成と語源学の物理的原理についての論』はド・プロスの意図をありのままに表わしている。

こうして、ド・プロスにとって音声と発音器官の分析は、原初言語の構成を探求するためには不可欠のものとなる。ド・プロスは音声を母音に対応する声

voix と子音に対応する分節 articulation のふたつに分割するが、母音は音声の質料を、子音はその形相をなすものとされる。そして、上で見たように、音声は客体の固有性の形象を描くことを目的とするのだが、母音はその形象を聴覚的に支える質料にすぎず、形象化はもっぱら子音のみによって行なわれる。したがって、原初言語において母音は何ら弁別性をもたず、ただひとつの音 a に還元される。そして、子音は器官の分節運動の属性にしたがって、唇、のど、歯、口蓋、舌、鼻に属する 6 つに分類される。さらに同一器官に属する子音は 3 つの音的特性にもとづいて (doux, moyen, rude) 分類されるが、これら同一器官によって調音される子音同士は相互に交換可能であるとされる。こうして、原初言語はひとつの母音と 6 つの弁別的子音によって成立することになる。(このような母音を軽視するド・プロスの音声分析の背景には、母音を書き表わさないセム語の表記法の理想化があった。ド・プロスの理論における〈文字〉の重要性についてはここでは扱わないことにする。)

こうして音声の分析を行った後に、ド・プロスは原初言語を構成する語要素の考察に向かう。それは形成される順序にしたがって「6 つの秩序⁽⁸⁾」として示される。第一は内的感覚を示す間投詞で、たとえば苦痛は喉音が、嫌悪は唇音が、疑いは鼻音が表象する。第二は、発音器官の構造にもとづいて形成される「必然的な」語で、幼児ことばがこれにあたる。ここでは最もたやすく動かしうる器官による音から順次に用いられ、それはまず唇音、ついで喉音、そして歯音である。だから、最も小さい幼児は、最も広い母音 a に支えられた唇音—papa, mama—だけを発するのだとされる(ヤコブソン風に言えば Why mama and papa? というわけだ)。第三は「殆ど必然的な」語で、発音器官の運動それ自体による器官の名称さらに器官の運動を指す語である(喉は G (orge), 舌は L (angue), 歯は D (ent) 等々)。第四はオノマトペで、名示される物体がたてる音を模倣する。第五は子音の形象化能力によって音をたてない物体や精神現象を指し示す要素である。たとえば、発音器官のうち最も動かない歯による歯音 t は固定性を、最もくぼんだ器官による喉音 k は空洞性を、さらに r は粗さを、fl は浮動性を表象する。第六はアクセント、イントネーションなどの韻律的要素がつくる。(ド・プロスのあげるすべての要素さらにそれらの具体例は

多岐にわたるのでここでは省く。)

ド・プロスはこうした音声要素を真正な意味での語根 *racine* と呼ぶ。ド・プロスにとって歴史言語の中に語の由来を示すためだけの語源は「厳密にはそうとは呼べない」語根であって、「いかなる恣意的な規約にも依存しない、器官の形態から生まれた音声」だけが真の語根である。「なぜなら、それは物理的語源をもっているから、つまり、その形成の原因が内的器官にあるか、外的客体にあるかだからだ⁽⁹⁾」。そして、こうした語根から成る原初言語は「どの民族もその最初の単純さで知りもせず使用してもいい。けれども、すべての人間はそれを話しているのであり、原初言語はあらゆる国々の言語の第一の基礎をつくっている⁽¹⁰⁾」のである。だから、〈自然〉にもとづく原初言語を構成する語根は、汎時論的な言語の普遍素となるのであって、ド・プロスの語源学は、諸言語の語彙の中からこうした語根普遍素を洗い出すための方法なのである。

けれども、言語はいつまでも原初の必然性の体系のままにとどまっていたりはなかった。言語はしだいに時間的進展のうちに原初の自然的状態からかけ離れ、音声と客体との結びつきはゆるめられてくる。ド・プロスはこの過程を派生 *dérivation* と呼ぶ。そして、ド・プロスは、自身の言語観（〈言語のメカニク〉）に忠実に、この派生においても言語は合理的規則にもとづいて変化していくことを説くのであり、かれの理論の影響の大きさはこの歴史的言語変化の合理性の強調によっていた。

派生は、語の音声形態の変化である「実体の派生」と語の意味の変化である「観念の派生」のふたつに分けられる。まず実体の派生であるが、上で見たように原初言語はひとつの母音と6つの子音から成ることから、それがそのまま実体の派生による音声の同定の基準となる。つまり、さまざまな母音は原初言語のただひとつの母音の変異体であるからそのちがいは無視してよく、子音は同じ発音器官によるものであればひとつの子音の変異体と見なしてよいことになる。ひとつド・プロスのあげる例をだせば、ラテン語の *fort* とチュートン語の *vald* は同じ語源をもつとされる。なぜなら、o-a のちがいは無視してよく、f-v l-r t-d はそれぞれ同一の器官一唇、舌、歯一の異なる運動によるものとされるからだ⁽¹¹⁾。（ただし、こうした語形変化における同一発音器官による子

音同士の交換可能性は、すでにストア派が *commutatis litterarum* という概念で言い表わし、中世から近代へかけて語源学ではしばしば用いられる方法ではあった⁽¹²⁾。)さらに、派生における音声付加、同化、脱落は調音器官のずれや緩みに原因が帰せられる。

ここで指摘すべきは、言語の歴史的変化を説明するために文彩理論が根拠になりえたということである。文彩理論は、言表が本来的慣用から逸脱することで修辭的効果を生むという共時的現象だけでなく、語源から派生語へという語の通時的变化を説明することもその任務としていたのだ。たとえば、ボーゼは上で述べたような語形変化は *métaplasme*—措辭の文彩 *figure de diction* の総称一によって説明しようと思っていた⁽¹³⁾。それに対し、ド・ブ罗斯は意味の変化である觀念の派生を説明する際に、文彩の概念を大幅に利用する。

ド・ブ罗斯によれば、派生の過程においては、新しいオノマトペを別にすれば、ひとつの語根も作られはしない。「作られる新しい語は、派生、アナロジー、メトニミー、つまり *figure*(文彩)によるものにすぎない⁽¹⁴⁾」のである。つまり、觀念の派生は、語が原初言語の語根が表象する意味から離れて、比喩的意味を獲得していく過程であって、そのうちド・ブ罗斯が最も重視するのは、隣接 *approximation*—ド・ブ罗斯の使う意味あいを含めてこう訳しておく—による派生、メトニミーによる意味変化である。隣接の派生によって、語はもとの意味からそれに隣接する意味へと変化したり、同一客体の異なる見方を表わす意味を手に入れて行く。

こうして、派生によって音声面でも意味面でも、語は増殖し、言語は発展して行くのである。しかし、同時に、この派生は言語が〈自然〉に基づく起源の調和的体系から失墜し墮落して行く過程でもあった。なぜなら、派生によって言語は原初の物理性を失い抽象化し形而上化して行くからである。「名前とそれが指し示す客体との間の関係の忠実性」は、「自然とは無縁の觀念の暗示によって自然が損われ、たやすく知覚されねばならない連続性がもはや感じられなくなるほど、派生語が語根から遠ざかってしまったときから、言語の中には見出されない⁽¹⁵⁾」のである。

この点でド・ブ罗斯が最もきびしく非難するのは、觀念の派生のうちのもう

ひとつのもの、比較 *comparaison* による派生、メタファーによる意味変化である。メトニミーとメタファーは、単純観念に付随観念を結びつけるという点では同じ転義 (*trope*) でありながら、メトニミーは客体同士の隣接関係にもとづく意味の転移であり、その偶然性は一応のところ物理的状況の規制のもとにある一方、メタファーは、全く何の関わりももたない客体同士の比較から類似性をひきだすことで、人間の想像力が恣意的に作り出すものだからである。

「この恣意的な比較の方法によって、先に述べた（隣接の）方法以上に、自然は墮落させられ、客体はねじまげられる⁽¹⁶⁾」のだ。

したがって、語源学によって派生を遡り語根を見出すことは、今では痕跡としてしか言語の中に存在していない〈自然〉の秩序をもう一度よびおこすことなのである。だが、ド・プロスには、同じような語源学を同時代に試みたクール・ド・ジュブランのようなある種の神秘主義的言語観は全く見られない。あくまでド・プロスは啓蒙主義の子であった。ド・プロスはこう言うのである。「しかし、この（原初言語からの派生という）不都合は、それ自体はさきやかなものにすぎないように見えても、あらゆる単語の誤謬や不完全な観念がそうであるように、この不完全な方法の適用が慣習、意見、教義の方に向ってしまうと、時にはきわめて重大な結果となる。……観念と語の中に明確さがなければ、話せば話すほど互いに理解し合わなくなる。争いは終ることなくそして終りえない。……争いは簡単に精神から肉体へつまり不同意から不和へと移る。……人々は憎みあい殴りあい実際に殺しあう。それもおそらくは何も意味のないいくつかの単語の意味についての意見のくいちがいのために⁽¹⁷⁾」。

ド・プロスによれば、精神の中の誤謬は「言語の中に名前があるということだけで、語が現実の事物を指し示しその事物が自然の中に存在する⁽¹⁸⁾」と信ずることから生まれるのである。そして、これは客体世界と物理的に結びついた原初言語に人間が恣意的想像力を働かせることで〈派生〉という〈自然〉からの失墜を生みだしたことから来る必然的な帰結なのである。したがって、語源学によって〈語根〉を洗い出し原初言語を再構成することは、観念の伝達に何らの阻害のない世界をよびおこすことで、現在の混乱した言語の慣用を癒し矯正する手段となるのである。つまり、ド・プロスは、啓蒙主義がロックからひ

きついだ言語の濫用の批判というテーマを、かれなりのやり方で展開したのである。ド・ブロスは自身の語源学の目的を「諸観念の検査と完成を目ざす⁽¹⁹⁾」こととするのは、まさにこの意味においてである。

だから、ド・ブロスは〈起源〉へのノスタルジーにふけていたのでは全然ない。それどころか、その語源学の方法が宗教的形而上的語彙—*âme, ange, miracle* など—にあてはめられて、それらの語源における意味は単なる物理的現象を指すにすぎず、その後の観念の派生は恣意的想像力が作るメタファーによる〈自然〉からの逸脱の過程だということが示されるなら、語源学は偶像破壊のための恐ろしい武器ともなるのだ。ド・ブロスがある手紙の中で自身の語源学をあのエルヴェシウスの『精神について』と比較したことは、理由のないことではなかった。つまり、ド・ブロスの真に目ざしたのは、機械論的世界観からの、抽象物の実体化の批判、言語フェティシズム批判なのであった⁽²⁰⁾。(ちなみに、*fétichisme* という語は、ド・ブロスとその著書 *Dieux fétiches* (1760) の中で初めて用いたのである。！)

ド・ブロスの『言語の機械的形成論』は1765年に刊行されるが、かれの理論はそのときすでに少なからぬ人によって知られていた。というのは、ド・ブロスは1751年にパリの碑文美文学アカデミーでふたつの「語源学の材料についての覚え書」を発表しており、さらにその覚え書を『百科全書』掲載のためディドロに送っていたからである。それらは *Lettres, Langues, Métaphore, Onomatopée* の項目で引用符やただし書き付きでそのまま掲載される。しかし、かんじんの語源学の項目では、ド・ブロスの覚え書は上の四つの項目のように用いられなかった。ド・ブロスの覚え書をもとに語源学の項目を書くことになっていたモルレ神父は、覚え書とともにこの任務を若きテュルゴに委ねた。しかし、テュルゴは、ド・ブロスの覚え書はオノマトペの項目の方によりふさわしいと考え、語源学の項目を自ら書きあげた。それが百科全書第6巻(1756)の中の *Etymologie*⁽²¹⁾ である。

ド・ブロスの覚え書に多くを負っていることはテュルゴ自身この項目の最後のところでことわってはいろのだが、それが出版されるや、テュルゴの語源学

はド・プロスのものの剽窃ではないかという非難がまきおこった。だがド・プロス自身はおじへの手紙の中でテュルゴを弁護して「(百科全書の)語源学は彼のもの、私の *Traité* は私のもの」と言う。これはド・プロスの寛容さの現われではない。ド・プロスは、いくつか的方法的規則は共通しているものの、「われわれは物事の根本において立場を異にする」と言うのである⁽²³⁾。このド・プロスの観察は正確であった。それでは、同じ語源学でありながら、ド・プロスとテュルゴの相違はどこにあるのだろうか。

テュルゴは、言語記号の本質の把握からしてド・プロスとは袂を分かち。「語はそれが表わすものと何ら必然的な関係をもたない⁽²³⁾」のである。上に見てきたように、ド・プロスの理論の根本は(少なくとも原初言語における)語と客体、音声と観念の必然的な結びつきを肯定すること、つまりは言語起源の自然説にあった。テュルゴはこれに対して言語記号の恣意性を認めるのだが、そうかといって、古来から自然説に対立して来た規約説をとるわけでもない。「ある音声がある観念をわれわれの精神の中に呼びおこすのは、人間の間で決められた規約 (convention) によるのでさえない⁽²⁴⁾」のである。それでは、言語を根拠づけているものは何かといえ、それは「殆ど似たような状況で同じ音声がくり返されるのを聞くことによって幼児期につくられた習慣⁽²⁵⁾」である。同じように言語記号の恣意性を肯定するとはいえ、規約説ではなく習慣説をとることは、決してささいなちがいでない。なぜなら、テュルゴの言うような、経験の反復が定める習慣の成立には、すでに前もって言語が存在していることが前提となっているからだ。こうして、テュルゴは、言語の制定は自然によるのか規約によるのかという問いを、つまり言語の起源についての問いそのものを無意味なものとしてしりぞけるのだ。この〈起源〉へのまなざしの拒否という態度こそ、テュルゴの語源学を貫通する縦糸なのである。

このことは、テュルゴが語源学の対象として何を選んだかを見ることでよりはっきりとする。上のように言語記号の恣意性を一般的なテーゼとしてたててしまえば、ド・プロスが仮定した〈自然〉に基づく原初言語という構築物は完全に否定されるのである。テュルゴはそれを次のように表わす。「われわれはそこ(語源学)には、語の制定の原初の原因、言語の起源と進歩、語とそれを

発音する器官やそれが表わす観念との関係についてなしうる研究を含めないことにする⁽²⁶⁾」。つまり、テュルゴが語源学から排除したものこそ、ド・プロスの語源学の真の対象なのである。なるほど、テュルゴにしても語源学とは派生語 (dérivé) から原初語 (primitif) へと遡るための方法であることにはかわりはないが、テュルゴの言う原初語は、ド・プロスの言う語根一音声と意味が必然的に結びつく要素一ではないことはもはや明らかだろう。それは、ド・プロスによれば「厳密にはそうとは言えない」語根、語の由来だけをしるす歴史的語源なのである。遡るべき到達点はド・プロスにとっては〈起源〉に、テュルゴにとっては〈歴史〉の中にあったのだ。

さらに、語源へ到達するための方法の点でも、テュルゴはド・プロスから遠ざかる。そのひとつは、ある語の語源をさぐるためには「原初語から派生語への継起的に続く段階的变化をたどる⁽²⁷⁾」ことが不可欠の条件だとする点である。ド・プロスにあっては、ある語の中にそのまま原初言語の語根を見出すことが問題であり、そして、語の間の派生的連関はその語根を共通に持ってさえすれば打ちたてられたのであったが、テュルゴはこの原初言語の仮定は捨て去っていたのである。テュルゴはこう言う。

「いくつかの推測によってしか本当らしくならないような語源は、ことごとく捨てさらねばならない。……したがって、原初語が意味においても音声においても派生語からひじょうにかけ離れているような語源を推定するならば、そして、それらの間にいくつもの中間的变化を想定せねばならないならば、それについてなしうる最も確実な検証法は、これら変化のひとつひとつを調べることである。良い語源とはその変化のつながりが直接知られた連続した事実であるか、真実と思われる帰納によって証明されたものであり、悪い語源とは間隔が根拠のない仮定のつらなりでしかみたまれないもののことだ⁽²⁸⁾。」

テュルゴはかれの言う良い語源の例に、フランス語 *jour* の語源にラテン語 *dies* をたてることを挙げる。たしかに、これらふたつの語だけではその発音のへだたりから連関は保証できないが、この間に既知のふたつの語、*dgiorno* と発音されるイタリア語 *giorno*、ラテン語 *dies* の形容詞形 *diurnus* を置けば、*dies*→*diurnus*→*dgiorno*→*jour* という変化の連続性が確証できる、とテュ

ルゴは言う。これに対して、実証的知識によって語形態の連続的変化がたどれないようなものは、「悪い語源」となる。(テュルゴはフランス語との間の媒介をなすものとしてのイタリア語とガスコーニュ語の重要性を強調している。)

さらに重要なのは、テュルゴが他の個別言語から語源を引き出すことは原則的に許すべきでないとする点である。語源学の第一歩は、対象とする語が属する言語に固有のアナロジー——これは観念間の合理的連関を指すコンディヤックの用語だ——をよく調べ、それによって語から文法的屈折要素をそぎ落として最も単純な要素に還元することである。そして、「他の言語から引かれた語源が、明らかにしたい語の言語に固有の語尾変化を説明してしまうなら、その語源は認めえない⁽²⁹⁾」とテュルゴは言う。たとえば、17世紀の語源学者ポシーヤルは、ラテン語の *insula britannica* という語をヘブライ語の *baratanac* から説明するが、*britannicus* は派生形容詞であり、ラテン語は語根として *britan* しか知らないのだから、この説は誤りであり、ヘブライ語に語源を求める者達は殆どこの種の誤りをおかしている、とテュルゴは批判する。それに加え時間・空間のあまりのへだたりは、その語源を疑うに十分な要因であった。「パリの近くの村の名前を、ヘブライ語やアラブ語から由来させようなどと試みてはならない⁽³⁰⁾」のである。

だからまず目をやるべきなのは、個別言語それ自体の変化、時間的・空間的変異である。それを調べるための材料には、過去の記念物や古文書、古い語彙表などがあるが、テュルゴが最も重視するのは方言である。なぜなら、「さまざまな地方で使われている方言は、洗練された言語 (*langue polie*) ほど変化を蒙らなかった⁽³¹⁾」ので、多くの語の古形を保存しているからである。

さらに、他の言語に語源を求める場合には、「諸民族の移住、征服、それらが相互にとりかわした交流についての実証的、歴史的知識⁽³²⁾」が必要であり、もしこの知識が欠けているときにはふたつの言語の混淆を説明しうるような確実に知られた多数の語源が存在することに基づかねばならない。この原則から言って、フランス語からラテン語へ、チュートン語からケルト語へ、ラテン語からギリシャ語へと語源を遡るのは許されるのだ、とテュルゴは言う。(こうした民族間の接触が語の借用に及ぼす影響についてテュルゴは精密に論じてい

るが、今は省く他ない。)

テュルゴは、個々の言語はそれぞれ固有の音声と文法の構造をもっているのだから、異なる言語に属する単語同士が音声的意味的類似性をもっていたとしても、それだけではそれらの派生関係を保証するには十分でないと理解していた。この点からすれば、ド・ブロスのように、個々の言語体系の固有性を顧慮せずに、語は派生の過程で同じ発音器官による音同士を交換するとか、さらに、母音の変化は規則性がないから無視しうるなどと言うことはできない。テュルゴは、正当にも、そのような見解の背後には、ヘブライ語の書記法を音声変化の解釈にあてはめるという途方もない誤りがあると言う。

「母音がどんなに変わりやすくとも、その変化は子音と同様、同一の時と場所において規則的に起こる。ギリシア人はエータとユブシロンのかつての音を *i* に変え、イギリス人は恒常的規則にしたがってフランス語の *a* にギリシア人のエータの古い音を与えた〔例, *grace*〕。母音は子音と同様にすべての言語の発音の一部であり、いかなる言語においても発音は恣意的になされるのではない。……*y* (ヨーツ) を口蓋子音に、*l* を舌子音に含めるヘブライ語の文字の区分にはひと目をくれずに、イタリア人は〔ラテン語において〕子音が先立つ *l* を、ヘブライ語の *y* に似た *i trema* の弱湿音に変えた。platea, piazza; blanc, bianco。同じ状況でポルトガル人はこの *l* を恒常的に *r* に変えた。branco⁽³³⁾。」

テュルゴにとって、個別言語の内部において起こる固有の音声変化の規則性こそが、語源学が明らかにすべき対象なのである。したがって、時間、空間の限界をもたずにあらゆる音声変化を説明するような一般的法則は存在しない。テュルゴは「無限に増大した諸変異をひとつの固定した法則に絶対に導かないようにしよう。……歴史的事実を研究するようにただその連続性だけを研究しよう⁽³⁴⁾」と言う。つまり、テュルゴの言う言語変化の規則性とは、ドロワクスが指摘するように、「所与の言語、所与の時点における規則性⁽³⁵⁾」であって、普遍的妥当性をもつものではないのだ。ド・ブロスはある意味で言語を機械論的法則が支配する自然科学的対象とみなしたが、テュルゴはそうした見方を排し、言語を歴史的生成の中にとらえたのである。

先に述べたように、ド・ブロスにとっては、原初言語の語根はあらゆる言語の汎時論的普遍素でもあった。したがって、歴史言語を原初言語へ還元するという作業は、時間と空間の連続性を無視して行いえたのである。つまり、〈起源〉の原初言語は〈歴史〉を解釈するための非時間的コードだったのであり、〈起源〉は〈歴史〉を超越的に支配するのである⁽³⁶⁾。テュルゴはこのような〈起源〉を追放し、連続的時間から成る〈歴史〉を内在的に実証的知識だけをもって解釈することを語源学の目的としたのである。だから、テュルゴが「語源学の技術の最も直接的な適用は、個別言語の諸起源の探求である⁽³⁷⁾」と言うときも、その〈起源〉は各の言語の固有な歴史的時間の中に存在するのである。テュルゴによれば、この個別言語の歴史的起源の解明は、その言語の文法体系の分析に役立ち、それによってさまざまな言語を比較することが可能になる。そして、「この（諸言語の比較という）予備作業は……言語の形成と進歩におけることばと人間精神の歩みの一般理論を把握するために不可欠⁽³⁸⁾」なのである。

けれども、テュルゴにとって、語源学それ自体は決して言語の一般理論なるものを提示できないのである。テュルゴはかつて言語研究にはふたつの視点があると言ったことがある。ひとつは言語の発展の中の人間精神の進歩を調べる哲学的研究、もうひとつは諸民族の起源と混淆を調べる歴史的研究である⁽³⁹⁾。語源学はある意味でこの後者の言語の歴史的研究の具体化であって、その真の目的は「言語の一般理論という大いなる構築物を打ち立てるために、哲学に材料と観察を提供する⁽⁴⁰⁾」ことにある。つまり、テュルゴにとって語源学は science ではなくあくまで art なのだ。（テュルゴは、単語の〈語源〉でなく〈語源学〉ということを特に指すときには art etymologique と言う。science/art の二分法は啓蒙主義に特有であり、前者は普遍性の領域における一般理論、後者は偶有性の領域における個別理論を指す。たとえば、一般文法は science であり、個別文法は art である。）もちろん、science と art は分離しているのではなく両者の相互作用があってこそ真理の認識が確実になることは啓蒙主義がしばしば強調したことだが、それでもなお両者が独立にもつ真理性は審級が異なるのである。だから、art としての語源学は、歴史における経験的偶有的事実

のみを対象とするため、それだけでは普遍妥当性をもたない蓋然的知識にしか到達できないのである。ところが、ド・プロスによれば、語源学は science としての言語の一般理論—かれの原初言語の理論はまさにそうしたものだ—をも一挙に提示するものだったのである。したがって、ド・プロスとテュルゴとは、学の体系の中で語源学の占めるべき審級がくいちがっていたのだ。

しかし、ド・プロスとテュルゴが真向うから対立するのは、まさにこの言語の哲学的把握、言語の発展のシェーマの把握そのものにおいてである。すでに述べたように、ド・プロスは、〈自然〉にもとづく原初言語の中に人間のつくる恣意性が入りこむことで〈派生〉が生まれ、言語は〈起源〉の調和的体系から失墜していくと見ていた。そして、この失墜の原因は想像力の作り出す比喩、特にメタファーであった。ところが、テュルゴにあってはこのパースペクティブが完全に逆転する。人間がいまだ感覚にうずもれた精神生活を送っていた起源にあっては、言語はすべて可感的像をよびおこすメタファーから成るが、人間が理性的能力としての反省を獲得するにしたがい言語にアナロジーが貫徹し、語は明晰判明な単純観念の記号となっていくことで、言語は〈進歩〉するのである（野蛮言語から文明言語への歩み）。ド・プロスは、いかに形而上的要素の介入を拒み機械論的に言語を把握したとしても、全体的価値づけにおいて、起源からの失墜の神話、いわばバベルの神話の世俗版に基づいていたのだが、テュルゴは、コンディヤックがうちたてた言語の一元的進歩の枠組に基づいていたのだ。だから、テュルゴが、ド・プロスの自然的原初言語の仮定を打ちすててかえりみななかったのは、語源学が個別理論にとどまることからの要請であるのみならず、かれの言語進歩観からいって当然のことであった。テュルゴにしてみれば、歴史の彼方の起源はド・プロスのように遡るべき理想郷では何らなかったのである。

ところが、ド・プロスとテュルゴが対立する地点の裏側で、両者は共通の認識をもっていた。それはメタファーへの眼差しである。言語の歴史的行程の理念型において、メタファーが増えていくのか（ド・プロス）、減っていくのか（テュルゴ）はここでは重要でない。問題は、両者ともメタファーが言語の本来の姿を脅かす〈悪〉だと見なすことにある。こうして、メタファーは、ド・

プロスにとっては起源からの〈失墜〉の原因として、テュルゴにとっては〈進歩〉の阻害物として現われる。啓蒙主義は、言語の本質的目的は思考の忠実な伝達であるとして、観念と透明な関係をもつ言語を理想的状態として描いたが、ード・プロスの原初言語、テュルゴの文明言語は存在様式こそちがえそうしたものだ、そこにおいて多義性と不透明性を言語にもちこむメタファーは、排除すべき〈悪〉として登場するのである。

だから、テュルゴの語源学は、art にふみとどまったがゆえに、かろうじてこうした啓蒙主義の言語イデオロギーから身をかわして、後の比較言語学の先駆となりえたのだ⁽⁴¹⁾、と言ったら、少し逆説的にすぎるだろうか⁽⁴²⁾。

(注)

- (1) G. Genette, *Mimologiques*, Paris, 1976; P. Zumthor, *Etymologies, in Langue, texte, énigme*, Paris, 1975. ただし, Zumthor も指摘するように, 近代以前の語源学は, 語の系統性 (filiation) ではなく有縁性 (motivation) の研究であり, 語の〈起源〉と言う場合も何ら時間遡求の問題ではなかった。特に中世では語源学は修辞学と密接に結びついていた。
- (2) この *Traité* 自体は見る事ができなかったので, その要約である H. Sautet, *Un linguiste français du XVIII^e siècle: Le Président de Brosses*, Genève, repr, 1971, その抜粋を含む J. Roudaut(ed.), *Poètes et grammairiens au XVIII^e siècle*, Paris, 1971(ただし, Roudaut は *Traité* の参照ページを記していない), さらに Genette, Droixhe, Auroux などの諸論文を参照した。
- (3) De Brosses, *Traité*, t. 1, p. 28.
- (4) *Ibid.* t. 1, p. 30-31.
- (5) Roudaut, *op. cit.*, p. 265.
- (6) De Brosses, *Traité*, t. 1, p. 9-10.
- (7) *Ibid.* t. 1, p. 2.
- (8) Roudaut, *op. cit.*, p. 269-282.
- (9) De Brosses, *Traité*, t. 11, p. 346.
- (10) *Ibid.* t. 1, chap. XVI.
- (11) *Ibid.* t. 11, p. 322-323.
- (12) Cf. P. Diderichsen, *The Foundation of Comparative Linguistics*. in D. Hymes(ed.), *Studies in the History of Linguistics*, Indiana U. P., 1974, p. 277-306.
- (13) Métaplasme, in *Encyclopédie*, t. x, 1765, p. 440.
- (14) De Brosses, *Traité*, t. 11, p. 112.

- (15) *Ibid.* t. II. p. 54-55.
- (16) Roudaut, *op. cit.*, p. 284.
- (17) De Brosses, *Traité*, t. II, p. 257-258.
- (18) *Ibid.* t. I, p. 34.
- (19) *Ibid.* p. 33.
- (20) Cf. D. Droixhe, Matérialisme et histoire dans la linguistique du Président de Brosses, in *Logos Semantikos: Studia linguistica in honorem Eugenio Coseriu*, vol. 1, Berlin, 1981, p. 69-75.
- (21) Turgot, *Etymologie*, in *Oeuvres de Turgot*, vol. 1, Paris, 1913, p. 473-517.
- (22) *Ibid.* p. 517. の脚註参照。
- (23) *Ibid.* p. 474.
- (24) *Ibid.*
- (25) *Ibid.* p. 475.
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.* p. 467.
- (28) *Ibid.* p. 490-491.
- (29) *Ibid.* p. 491.
- (30) *Ibid.* p. 493.
- (31) *Ibid.* p. 479.
- (32) *Ibid.* p. 493.
- (33) *Ibid.* p. 500-501.
- (34) *Ibid.* p. 501.
- (35) D. Droixhe, *La Linguistique et l'appel de l'histoire (1600-1800)*, Genève, 1978, p. 211.
- (36) Cf. S. Auroux, *La Sémiotique des encyclopédistes*, Paris, 1979, p. 297.
- (37) Turgot, *op. cit.*, p. 504.
- (38) *Ibid.* p. 505.
- (39) S. Auroux, *op. cit.* p. 291.
- (40) *Ibid.*
- (41) テュルゴの語源学の比較言語学に対する先駆性については, Diderichsen, *op. cit.*; Droixhe, *op. cit.*, p. 204-215.
- (42) 最後に, ド・ブロスとテュルゴの対立点をもうひとつあげれば, 言語と国民の固有の性格の形成を, ド・ブロスは気候風土の物理的原因 (*cause physique*) に, テュルゴは政治, 歴史, 文化などの精神的原因 (*cause morale*) にもとづかせた点がある。言語と国民の性格 (*caractère*) という主題は啓蒙主義言語論がさかんに論じたものであるが, ここでも, テュルゴの歴史性を重視する態度はかわらない。ただし, テュルゴの断片「国民性格」(Turgot, *op. cit.*, t. I. p.

338) は、実は、ヒュームの「国民性格論」の冒頭部分の翻訳である。(シェル版全集はこのことを記していない)

(筆者の住所：〒270-11 千葉県我孫子市白山2-13-13)